



三月のスケッチ

研究室の窓から小さな竹やぶが見える。駐車場の奥にあるその姿は、寄せ鍋の中から突き出たエノキの束のようで、裾に止めた多様な車が魚やネギ、豆腐に見えて何だかおかしい。そんな竹やぶも、動物たちの楽園と見えて小鳥から猛禽類、小動物が集ってくる。

今日も、卒業を間近に控えた学生たちとたわいもない話をしていた時、ふと窓の外に目をやると、その竹やぶがこれまでにないくらい揺れていた。春の訪れを伝える春一番か。そんなことを思いながら学生たちに目を戻すと、1人の学生が「来月から社会人です」と期待と不安の入り交じる声でつぶやいた。少ししづめられた空気が流れたが、どうにか取り繕って学生たちを見送ると、急に寂しくなった。教育者としては少し青くさいだろうか。

近年の卒業式は少し様子が変わっ

てきていると感じる。十数年前まで、祝辞と言えば巣立つ若者を鼓舞し力強く送り出す内容だったが、近頃は「つらくなったらいつでも帰ってこい」という趣旨の言葉が多い。まるで、映画「フォレストガンプ」のワンシーンで「何かあったら、勇気など見せずに走って」と恋人を戦地に送り出す時の悲痛な叫びのように。確かに社会は日々複雑さを増している。そんな社会で快刀乱麻を断つがごとく、答えを導き出すことは難しいだろう。などと考えていると、ますます気がめいといった。

研究室の窓に近寄り、外を見ると先ほどの学生が楽しそうに歩く後ろ姿があった。その奥にある竹やぶは、寄せ鍋が食べ頃を知らせグツグツ煮えているかのように大きく揺れている。同じ食材など一つもない多様な個性の集まった寄せ鍋ほどうまい物はない。彼らはどこへ出ても立派にやっていいける。そう老婆心に言って聞かせたが、寄せ鍋などに例えたら、彼らは怒るだろうか。晴れの日には笑顔で送り出してやろう、そう決めたのだが、やっぱり三月は苦手だ。

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。40歳。